





寺田 透 著

万葉の女流歌人

岩 波 新 書

寺田 透

1915年3月横浜に生まれる

1937年3月学校教育終了

戦後始めて教職につく。中央大学予科・
第一高等学校・新制東大教養学部教員
ヴァレリー、バルザックの反訳を手始めに
文筆を業とするに至る

1969年6月教職を退く。以後の著作、「芸術の
理路」「ランボー着色版画集私解」「和泉式
部」「プールデル」「源氏物語一面」「道元の
言語宇宙」「入谷雑談」等。売文をもって世
を渡る

万葉の女流歌人

岩波新書(青版) 928

1975年4月30日 第1刷発行 ©



¥ 230

著 者

寺 田 透

発 行 者

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
岩 波 雄 二 郎

印 刷 者

東京都青梅市根ヶ布 1-385
白 井 倉 之 助

発行所 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩波書店
〒101 電話 (03) 265-4111

落丁本・乱丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

前 説

四十余年前『万葉集』をはじめて読んで、この歌集の中には随分小説のたねが沢山ころがっているなと思つた。それがこんな形で現実化されたわけである。

その頃大伴坂上郎女の周辺を、特に心を惹かれるものとして読んだかどうか、記憶にないが、最近時代は降っているのに、この大伴家の最後の大柄な家刀自には古代の面影があると思ひ、それが、昨年から今年にかけて雑誌『図書』に十一回の連載を始めるときの僕の第一のモチーフだった。その十一回分にさんざ手を加えた上、十二、十三、十四の各回を書足して出来たのがこの本である。

従つてこの本では、書名にもかかわらず万葉末期の大伴坂上郎女を中心とする二三の女流しか論ぜられていない。そのことを初めに言っておかねばならぬ。

出来方がそういう具合の本だし、もともと何事も不用意に始める僕の性癖と、こういう主題を扱うための基礎的訓練を僕が受けていないことのために、作業を開始してから、はじめて見る資料に出会つたり、それを分析せねばならぬという事態にぶつかったりで、この本を読む人

はどこへ連れて行かれるのか分らぬ困惑を覚えるかも知れない。しかしはじめから大伴坂上郎女はかくかくの女だと分っているひとの立板に水の説明をきくより面白いところもなくはなからうと、僕は思っている。もつとも、二三回自分ながら読みいとは言いかねる章もある。

郎女の姿形をはっきり見直すために『万葉集』を読みかえしはじめると、僕はたちまち笠女郎の歌に擱まってしまった。(同じいらつめなのに一方が郎女で他方が女郎なのは、当時和語としてひとしくいらつめと呼ばれていたのを、文字のある人たちが記録する段になって、かの女らの身分差にこだわり、二種に書き分けたからではなからうか。) 女郎の歌は身分も反映してか、丈高くのびやかに広がるという歌風ではない。しかし家持の何人かの愛人のひとりだったこの女性の歌は、奥行き方向に非常に切れ味よく深く切り込んで逸しがたく、とてもただの参考資料扱いですますわけには行かなかった。それでかの女が最初の回の主題となる。さらに回を重ねるうち、家持の歌との新しい組合せの可能性がかの女の作歌の中から見えて来て、結局かの女は何回も僕の筆端にのぼることになった。郎女の三度目の夫の娘で、郎女には義子にあたる田村大嬢たむらのおおいらつめの歌も、それが想像させる人柄とともに僕の好きなものとなったが、これもこのしごとの前には思ってもみななかったことである。

万事そういう具合で、笠女郎を論じていると『歌経標式』という未知の寧楽遺文ならいぶんがあらわれ、読んだこともない『古今和歌六帖』にも目をさらさねばならず、あちこちうろろきよ

るきよろした揚句やつと坂上郎女にとりかかると段になって、今度はそのとっかかりにとりわけ厄介な「怨恨歌」をえらぶようなことをしたのは、さまざまの矛盾した要素を孕むこの長歌が、かえつてもっとも端的に郎女を語るのではないかと感ぜられたからである。

そうして次第に分つて行つたことは、郎女の古代性は幻像であり、それをかの女はかの女の矛盾する諸要素の組合せから造り出しているということであつた。かの女の性的潤達と世上普通に通に信ぜられていることも、歌垣うたがきの幻像を、同族のあいだで作り出そうというかの女の歌人としての試みの結果ではなかつたらうか。しかもその郎女には古い豪族大伴家の財産管理者としての責任があり、その実務に任ずることも、どうやらかの女の厭うところではなかつたらしいことが興味を惹いた。

そうかと思うと、言霊ことだまはすでに死んで、世間無常の仏教思想が浸透しはじめた時代のただ中で、かの女は言葉の靈力を希求するのである、ただ、もうそれを信ずることはなく、である。

そういう郎女だが、しかし均衡を失わないかの女は、娘にはよく心を遣う母であり、婿にも愛深い外姑がいにこであつたらしい。

もしかしたらかの女の古代性として予感されたものは、この、しかも官能的な、均衡に他ならなかつたかも知れないときえ思われる。

こういう均衡を、事実としても意識的にも維持し、さきに述べたような事情で、歌を意識的

に作る立場に立つとすると、そこに、『古今集』——少くも業平や小町の『古今集』がまづかに眺められる地点に出るといふのは想像しやすいことだろう。

郎女は『万葉』を『古今』につなぐ橋だったと言える。

しかし、男歌と異なる性質のものとされる女歌でないのは明らかながら、やはり紛れようもなく女歌であるかの女の歌は、中古以降の、たとえば和泉式部の歌と、歌風の太いに違うものだったということも見逃すわけに行かない。

それが本稿のうちに、和泉の名がしばしば出る原因を形作った。

本来もつと、たとえば、額田王ぬかたのおおきみとの異同が考察されるとよかったのだが、比較が後代との比較にとどまったのは心残りである。

歌風に反映する作者の年齢や体験ということも執筆のあいだに当然ながらかなり大きな問題となった。その結果、『万葉集』では、歌の掲載の順序と、その制作年次とのあいだに、看過できない齟齬のあることが、しばしば話題となった。同じことの結果、はじめから意図したことではないが、笠女郎と大伴坂上郎女に関しては、評釈つき全歌集が出来上った。

内藤佼子さんにお礼を言わねばならぬ。別にこの著作の係りというわけではなかったのに、『図書』連載中の原稿の持ち運びから、資料探し、その複写など、道順のいいせいもあって、気安くたのめたかの女のいろんな尽力がなかったら、この書物はできたかどうか覚束ない。

それから、僕のようなあいそっ気のない著者のものでも、主題と雑誌『図書』の性格のせいで、多くのひとに一つ読んでやろうという気を起させたらしく、内容に関していろんな手紙をもらった。そのどれにも何も答えていないので、この機会に挨拶を返したいと思う。

一九七五年三月尽

寺田 透

目次

前説

一 笠女郎	一
二 『万葉集』卷四と卷八	九
三 『歌経標式』	三
四 怨恨歌	五
五 言 靈	六
六 理願挽歌	八
七 歌柄人柄	九

八	駿河鷹と……………	二五
九	はなに散らすな……………	三二
十	母性型・娼婦型……………	四七
十一	色好みの家……………	六三
十二	虫鷹、宿奈鷹……………	八一
十三	三日月の眉……………	九九
十四	女 歌……………	二五

一 笠 女 郎

『万葉集』に二十九首の歌を遺している笠女郎かまのいらつめという女性がいる。大伴家持の愛人だった女性だが、このひとの歌についてまず語りたい。話は『万葉集』に収録された歌の年代的最下限を天平宝字三年(七五九)正月一日の家持の歌とする定説を無視するように運ばれるだろうが、まあ、読んで頂きたい。

皆人を宿ねよとのかねは打つなれど君をし念もへば寐いねかてぬかも(六〇七)

有名な「笠女郎大伴宿禰家持に贈る歌廿四首」中の一首だが、まず第二句の「寝よとのかね(「金」)は」はどう解せるか。『日本書紀』に天智天皇の十年、漏刻が設けられ、それから打ち鳴らされるようになったと記されている時の鐘のうちの亥いのときの四点鐘を言う、というのが、定説である。

しかし「皆人を寝よとの」という言い方も、次に来る歌が

相念あひねはぬ人を思ふは大寺の餓鬼がきのしりへに額ぬかづくがごと

であるのも、この「かね」はただ陰陽寮で打った時鐘というより、それも鳴りはしたるうが、それにあわせて諸寺院で打ち鳴らされたその日の最後の鐘と考えるのが、むしろふさわしい解釈ではなからうかと、思わせる。

梵鐘が当時その時刻に撞き鳴らされたことはないという明証があれば別だが、天智天皇の十年（六七一）から一世紀ものちのこの時代、陰陽寮だけが都の中で時鐘を鳴らしていたとは考えがたいことである。

現に今も写した通り、「大寺の餓鬼」の像を気軽に比喻にとった歌の作られていることは、作者たちの身近に大寺小寺が少からず建立こんりゆうされていたことを想像させ、それらの寺が「人定たんにじょう」のとき、鐘をつかぬとはかえって想像しがたいと言えはしなからうか。

しかしそれにしても、ここで直ちに確認されるのは、笠女郎が、何人いるか知れない万葉歌人のうちで、ただひとり用いた比喻、イメージとして、「かね」がここに歌われていることである。『古事類苑』を見ても鐘、鉦に関する記載は日本の古典にあまり多くなかったらしいことが分り、あってもその記述は簡単不明瞭だったらしいが、中でも短歌は、笠女郎の歌だけが、

1 笠 女 郎

それを詠みこんだ作例として記録されている。

餓鬼の像も、ほかのどこかにはあるにしても、少くも『万葉集』の中からは、かの女の歌以外にそれを詠んだ作例として挙げられるのは、池田朝臣が、大神朝臣奥守の瘠身を嗤って作った歌一首

寺々の女餓鬼申さく大神の男餓鬼給りて其の子うまはむ(三八四〇)

があるだけである。

しかもその仏寺の像が、仏教的なものに拘束されることのない自分の感情の性質を、仏教に心を寄せていることの明らかな男に知らせるために、無価値なものの象徴として詠みこまれているのだ。

餓鬼は餓鬼で、これをおがんでもなんの効験もないものの、仏教的世界観の中では、六道のひとつの住民として、ちゃんと役割を持っているのに。

右の女郎の歌二首は『万葉集』中に相次いで掲げられているが、まずその関係を考える必要がある。

二首は、まず第六〇七歌のかねの歌が、贈問相手の家持の心を惹こうとするころみによっ

て作られたのに対し、それへの家持の応対がすげなく、はかばかしくなかつたためだろう、次の六〇八歌で、家持をからかうように、押んでもなんの功德もない餓鬼の像を比喩にとつて、自嘲と見せながら、自分ほどの女に心を動かすことのない相手をあざけるという形の關係になつている。

そこに見られる擲揄の調子は、ふたりの關係がすでに年所ねんじよ深いものであること、愛人家持の人間の弱さまで女郎には分つていたこと、そればかりかそのことを相手に見せつけることすら今はなんの憚はばかるに価いしないことだと自分の心得ていることを誇示してさえいると見えること、それらのことが二首をただ併列的に読むのでなく、積極的に組合わせることによつて明らかになる。

それからさらにどれ位時がたったか、何の事情によるのか分らないが、笠女郎は都を去つて、それからまた戻つて来ると、家持に、そのごく身辺から、

情こころゆもあは念はずきまたさらに吾がふるさとに還り来むとは(六〇九)

近くあれば見ずともありしをいや速に君が座いざさばありかつましじ(六一〇)

という歌を作つて贈る。

六〇九歌の「思はずき」という否定の過去形がどの位の頻度で、主としてどういふところに使われているか、研究もあるのだろうが、今の僕には確める術もない。ただ佐佐木信綱は「もはざりき」と訓^よんでいることが分っているだけである。しかしこの措辞の裁ち切るような、またひとの前でひとりごとを言うような、音の上でも勁^ぶくしかし濁ったひびきは、作者笠女郎がどこか地方の出身者、ではないまでも地方生活をしなければならぬことと思わせる。「ふるさと」というのも単にかつて長らく暮らしていた土地の意味にすぎず、生れ故郷の意味ではないのだろう。歌の「またさらに」という措辞がすでに本来の生れ故郷ではない、長らく住んでいた土地ではあるがまた離れるかも知れないかりの暮しの土地への、暫定的移動を語るように感ぜられる。

今風な想像を語ることが許されるなら、笠女郎はその職業上の要請にもとづいて、地方と都のあいだをこういう風に移動する女である。

思いがけず自分の身边にあらわれたかの女の声をきき、昔と同じ関係をよみがえらせたある日のあとで、家持は第六百十一の歌を作ったかの女に与える。

今更に妹にあはめやと念へかもここだ吾が胸おぼぼしからむ

それから、さらに家持がどこか遠方に行くことがきまるといふ情況が生じ、その結果作られ贈られたのがあの女郎の第六百十歌である。

それだけの事柄の継起と時間の経過を想定しないと、あなたの近くにいたからあなたに逢わずにもいられたが、だんだんと遠くへあなたが行くようになっては、自分は到底耐えて行かれまい、という女郎の歎きの表明は、その意味がとらえられぬものとなる。

しかもその家持の遠ざかり方が「いや遠に」といふ、時とともに遠くなるという形であるのを見ると、かれが生涯ときどき出かけて行った地方巡察のような離京のしかたが、このこととしてもまず想像される。長年月同一任地にある赴任が問題だったら、行った先の遠さが悲歎のたねとはなっても、そこまでの道のりにおける日々の遠ざかりを歎きのたねとして歌うということはなからう。日々の遠ざかりは、たとえば、

くれがたにをちの山辺はなりにけりいづくばかりに駒とどむらん(岩波文庫『和泉式部歌集』
清水文雄所定番号一四七八)

のように偲ばれるのが普通だろう。

さて右の歌を贈られた家持は歌う。

なかなか黙もだもあらましを何すとか相見そめけむ遂げざらまくに(六一二)

家持の離隔はかれ自身のどうにかしうるようなものではなく、女郎との離別は、そうせねばならないこととしてすでにきまったことのものである。どうして相逢い相思うようになったのだらう、添いとげることはできまいに、とここで言うのは、かれらの馴れそめからを回顧しての表現ではなく、思いがけず笠女郎がふたたびかれの身边にあらわれ、交情がよみがえったとき以来のことを思つて歌っているのだらうと僕は想像する。

このように、『万葉集』巻四にある笠女郎の家持に贈つたとされる二十四首の歌は、いくばくかの時をへだてつつ、違ふ情況のもとで作られたものに相違なく、全体を鳥瞰すると、第五八七歌の

吾が形見みつつしのはせあらたまの年の緒長くわれも思はむ

から「近くあれば見ずともありしを」の第六百十歌までのあいだには相当に長い時間がはさまっていると思われるべきである。そうなければ歌意がよく汲みとれないと僕は感ずる。